

# 日語派生動詞“～化する”之研究

蘇 文 郎

政治大學日本語文學系副教授

## 中文摘要

本論文作為日語變化表達法研究的一環，從型態、意義、構文論的觀點探討派生動詞“化する”的意義特徵及用法。探討的重點分下列 5 點：

- 1) 「～化する」的語彙結構及意義特徵
- 2) 以「～化する」為述語的句子所要求的格體制
- 3) 「～化する」的自他性
- 4) 在日語各種國語辭典及日本人對派生動詞「～化する」自他性認定的差異
- 5) 「～化する」和被動的關連性

關鍵詞：派生動詞、變化表達法、語基、結果狀態、自他性、連續性

# 日本語派生動詞 “～化する” の研究

蘇 文 郎

政治大学日本語学科助教授

## 要 旨

本稿では変化表現の研究の一環として、もう一つの形式“～化する”を形態的、意味的、構文論的観点から考察する。手順として次のようになる。

- 1) 「～化する」の語構成及び意味を考える
  - 2) 新聞記事からあつめた例をもとに派生動詞「～化する」のとり文型を整理する
  - 3) 「～化する」の自他性について分析する
  - 4) 国語辞典やネーティブの日本人に見られる「～化する」の自他性認定のゆれの問題を論じる
- そして「～化する」と受身との連続性についても言及する

キーワード：派生動詞、変化表現、語基、結果状態、自他性、連続性

# A Study of the Derivational Verbs “—*Kasuru*” In Japanese

Soo, Wen-Lang

Associate Prof. of Department of Japanese, National Cheng-chi University

## Abstract

This paper attempts to make clear the usage of the derivational suffix *-Ka* (“become / make X”) from the viewpoint of morphology, semantics and syntax. The main discussion includes:

- 1) The morphological structure and the special meaning of such category
- 2) The sentence patterns which the derivational verb “—*Kasuru*” demand
- 3) The intransitive and transitive uses about “—*Kasuru*”
- 4) The different recognition about the intransitive and transitive use of the derivational verb “—*Kasuru*” found in Japanese dictionary and used by Japanese native speakers.

In addition, the paper attempts to clarify the relationship between the “causative use” and “passive use” related to the derivational verb “—*Kasuru*.”

**Key words :** derivational verb, change-of-state sentence, stem, resultative state, the intransitive and transitive use

# 日本語派生動詞 “～化する” の研究

蘇 文 郎

政治大学日本語学科助教授

## 1. はじめに

筆者は蘇 (2001) で日本語の変化表現、主に述語動詞に「なる」が用いられる“XがYに／となる”、“XがY (形容詞連用形) なる”“(補文) こと／ようになる”形式の構文の意味用法について、日本語教育の立場から考察を行った。それによって、変化動詞「なる」の持つ構文の意味用法の特徴の一端を明らかにした。本論文では変化表現の研究の一環として、もう一つの形式“～化する”を取り上げて論じることにする。

接辞「化」は生産的造語力を持ち、いろいろな語（語基）と結合してさまざまな合成語を形成する。

漢語＋化：悪化、激化、白化、複雑化、顕在化、有料化、社会問題化

和語＋化：お祭り化、泥沼化、めす化

洋語＋化：グローバル化、バリアフリー化、マンネリ化、デジタル化、ゲル化、マイナス化

混種語＋化：ステルス技術化、会社持ち株化

ローマ字＋化：CD化、MIRV化、e化、DVD化、ET化

「化」と結合する語基として字音語の漢語だけでなく、和語、洋語、混種語、ローマ字（主に英語）に分類されるものも含まれる。「化」は合成語の構成要素として活発な造語力を発揮し、現代日本語の変化表現の、一つの重要な形式をなしている。

ところが、日本語の教科書を調べてみると、中、上級学習者向けの読解中心のものには「～化」「～化する」が使用される用例は出ることには出ているが、「～化」「～化する」の語構成や構文特徴、意味用法についての解説は殆ど見当たらない。文法解説書を調べてもほぼ同じ状態である。このことから中級段階は勿論、上級の段階になっても「～化」「～化する」についての知識は重要視されていないことが分かる。そのため、上級を終えた学習者でも「～化」については特に勉強しておらず、造語法や意味用法についての認識を殆ど持っていないのが実状と言えよう。

### 先行研究

接辞「化」に関しては、例えば水野 (1983)、田窪 (1986)、加納 (1990)、池上 (2000) など一連の研究が発表されている。これらの「化」の研究においては、接辞「化」が語構成要素として造語にあずかる時、どのような種類の語 (基) と結合し、どのような意味添加や品詞性の付与をするかといった視点からの考察が中心だったと言える。これに対して、最近構文論的視点や語彙概念構造の観点から動詞の自他使役性を論ずる論考が数多く見られた。それには、例えば江口 (1989)、影山 (1996)、小林 (2000) があった。本論文は主として「～化する」形式の派生動詞の用法、意味上の特徴を考察し、語彙概念構造の考え方をもとり入れて「～化する」の自他性を考えてみる。

本稿の記述の手順として次のように進めていくことにする。まず第2節において「～化する」の語構成及び意味を中心に考える。第3節では新聞記事からあつめた例をもとに「～化する」派生動詞がとる文型を整理する。手がかりは「～化する」がどのような格体制をとるかである。前稿蘇 (2001) で取り上げた「なる」による変化文との対応関係にも触れてみる。そして第4節では例文に見られる「～化する」の自他性について分析する。同時に国語辞書やネイティブの日本人に見られる「～化する」の自他性認定のゆれの問題を取り上げて論じる。

## 2. 「～化する」の語構成及び意味

派生動詞「～化する」の語構成の取り扱いにあたっては、何と言っても動詞全体が規則的意味を表すものと、不規則的意味を表すものに分けて把握することが肝要である。まず規則的意味を表す「～化する」の語構成であるが、普通、ある結果の状態を表す語が語基に来る。そして語基に来る語は原則として名詞系①②と、形容(動) 詞系③④のものが主であるが、名詞、形容 (動) 詞兼用のもの⑤と動詞系のもの⑥もある<sup>1)</sup>。

(意味)

一、名詞系＋化：①制度化、高齢化、義務化 (Nニナル/スルコト)

(N) 長期化、都市化、映画化

②男性化、西洋化、近代化 (Nノヨウニ/N的ニナル/スルコト)

居酒屋化、コンビニ化

二、形容(動) 詞系＋化：③ 激化、弱化、同化、強化 (Aj クナル/スルコト)

(Aj) 深化、濃化、鈍化

④ 複雑化、正常化、自由化 (Aj ニナル/スルコト)

多様化、温暖化、透明化

三、名詞、形容 (動) 詞兼用系＋化：⑤ 民主化、具体化、抽象化 (N的ニナル/スル)

(N') 本格化、普遍化、合理化

四、動詞系＋化：⑥立法化、顕在化、減量化 (V スルヨウニナル/スルコト)

(V) 減少化、統一化、固定化

接辞の「～化」はもともと単音動詞「化する」が虚辞化したものと考えてよい。単音動詞の「化する」は「あるものの形や性質が変わって別のものとなる、変化する、また別のものに変える」という基本義を持っている。自他両用のサ変動詞である。自発的変化の意味以外に“～させる”という使役性も付与される。したがって

---

1 加納(1990)を参照

「～化する」が持つ基本義「～（ある状態）ニナル／スル／サセル」からして、以上の6つの違うタイプが表す意味はそれぞれ右の括弧内に示される通りである。上の「～化する」が表す意味を規則的意味だとすれば、次のような不規則的な意味を表すものも数多くある。

「物化、同化、羽化、特化、脱化、電化、機械化、大衆化、泥沼化、工業暗化、ステルス化…」<sup>2</sup> や「口蓋化、唇化」<sup>3</sup> などのようにいずれも意味的に一律に「ある状態にナル／スル」と言い換えられないものである。語基の語は漠然とその言葉で特徴付けられる状況、性質のようなものを表しており、かなり複雑な様相を呈している。<sup>4</sup> なお「酸化、沃化、硫化、弗化…」などの「～化」は変化の意味はなく、動詞としての用法もなく化合物の意味である。これら自身が非自立的、語基あるい

---

2 上掲した語の意味を見てみよう。

物化：①ものが変化すること。②天命を終えて死ぬこと。

風化：①徳によって教化すること。②地表およびその近くの岩石が空気、水などの物理的化学的作用で次第にくずれること。

羽化：①昆虫の蛹が変態して成虫となること。

特化：他と異なる特別な物、事としてあること、また、特別扱いにすること。

脱化：①昆虫などが殻を脱いで形をかえること。

②ものの状態から抜け出して新しい形式や状態に変わることに。

電化：熱、光、動力などを、電力を用いてまかなうようにしていくこと。

機械化：①労働手段に機械を導入すること。

大衆化：一般民衆に広まり、親しまれるものとなること。またそのようなものにすること。

泥沼化：[泥沼] ② (比喩的に) いったん入り込むと容易に抜けられない悪い状況、状態になる。

工業暗化：19世紀後半の工業都市の発展に伴い、付近に生息するガ類に暗色の変異が増加した現象。

ステルス化：[ステルス技術] レーダーによる航空機、ミサイルの早期発見を困難にする技術。フェライトを塗ったり、機材、形状を変えたりする。

以上の項目の意味解釈は『広辞苑』5版によるものである。

3 口蓋化：口蓋音化する。唇化：音を唇音化するという意味を表す。

- 4 変化、進化、退化、帰化、孵化、分化、転化、溶化、感化、脱化...など、語構成が「一字漢語動詞+化」、いわゆる複合動詞も数多く存在する。その前接語の漢語と「化」がいろいろな意味関係をしている。本稿ではこれらの複合動詞の語構成を後者、つまり非規則的意味を表すものと認める。これについての考察は別稿に譲る。

は接頭辞となっているので、別扱いをしなければならない。したがって中国語話者の日本語学習者に対して、中国語の「～化」の意味がきれいに対応しているわけではないので、単純に翻訳して用いることは危険であることを指摘しておかなければならない。

### 3. 資料に見る「～化する」の意味用法

#### 3.1 「～化する」がとる文型

以下では「～化する」派生動詞が要求する補語数や格体制を手掛かりにその構文特徴を見ていくことにする。

資料<sup>5</sup> から抽出した結果、「～化する」がとる構文形式は主に次の三種類に分けられる。

- (I) Yが～化する ..... 一項述語
- (II) XがYに～化する ..... 二項述語
- (III) i) XがYを～化する ..... 二項述語  
ii) XがYを「Z」と～化する ..... 三項述語  
iii) XがYをZに～化する ..... 三項述語

以下それぞれの文型の意味、用法の特徴を実例をもとに述べてみる。

#### (I) Yが～化する

1. サンゴが白化する。(読売)
2. 生き残り競争が激化している。(読売)
3. 双子の赤字が深刻化した。(読売)

---

5 用例は主に毎日新聞(2000年)の社説と「みんなのひろば」(毎日新聞CD-ROM)及び読売新聞(2002年1月24～27日、7月6～9日衛星版)からとったものである。



4. 米国内の対日感情が先鋭化しても、草の根の個人的交流が揺るがなかった。(読売)
5. さもないと、すべての耕地が砂漠化してしまう。(読売)
6. 「光害」が問題化している。(読売)
7. 値下げ競争が長期化する。(読売)

この文型は、変化動詞“なる”による構文“XがYニ／トナル”や“Y（形容詞連用形）なる”と同じように、あるものが別の状態に変化するという基本的な意味を持っている。ただし、両者の格体制（項構造）が違う。変化動詞「なる」がとる文型では主体の変化結果を二格（あるいはト格）名詞で表す場合と形容（動）詞の連用形で表す場合があったのに対して、「～化する」による変化文が変化結果として生じてくるものの新しい状態を直接派生動詞のなかに取り込んでいることである。形態論的な分析が可能であり、その結果状態が可視的である。上の例で言えば、1、2、3、4の語幹が形容詞、形容動詞で5、6、7の語幹が名詞となっている。<sup>6</sup>

## （Ⅱ）XがYに～化する

8. 態度がようやく軟化した。(毎日)
9. 原油価格は需給の緩和もあり、1998年には1バレル＝10ドル台まで軟化した。(毎日)
10. 新巻きザケの季節を迎えたが、シロザケが年々スリム化していることにお気づきだろうか。(毎日)
11. 行政改革により来月一日からは中央官庁は1府12省にスリム化され、閣僚数も今より1～4減少する。(毎日)

8と10は前で考察した（Ⅰ）タイプの文であるが、使用される動詞「軟化する」

---

6 厳格に言えば、結果語は派生語動詞の形容（動）詞語幹（例えば「白」「激」「深刻」「先鋭」）や名詞の語幹（例えば「砂漠」「問題」「長期」）として機能している。

「スリム化する」自体すでに変化結果相当の意味「スリムになる」「穏やかになる」が含まれているため、原則として別途、結果語を取る必要はない。一方、例 9.11 では「1 バレル=10 ドル台まで」「1 府 12 省庁に」は形態的には変化の様態を表す副詞的修飾成分のように見えるが、9 では原油価格が軟化した結果「1 バレル=10 ドル台まで」に、11 では中央官庁がスリム化された結果、「1 府 12 省庁に」になったのだから、結果の状態を示す補語だとも一応言えよう。こういう二重変化表現は次に考察する (Ⅲ)「XがYを～化する」形式の文にもよく見られる。

(Ⅲ) i) XがYを～化する

12. 捕鯨国が捕鯨禁止を一方的に制度化してきた。(読売)
13. 一方、中国政府はネタがありすぎるほどあるのだが、これをドラマ化するには、かなり度胸が必要だ。(読売)
14. (彼らは) 同時テロを正当化している。(読売)
15. (政府は) はがきや封書などの郵便事業を 2006 年 3 月までに安全に自由化すると発表した。(読売)
16. 危機防止機能を強化するために必要な措置 (読売)
17. 植物には水を浄化する力がある。

事態を自然発生的なものとして捉えて述べる (I) の文型と対照的に、「強化する」「制度化する」「ドラマ化する」「正当化する」などの派生動詞はこれらの形容 (動) 詞ないし名詞語基が表す状態が生じるためには普通、対象物の固有性質だけでは不十分で外的な力が加わる必要がある。言わば、使役の意味構造が含意されていると認識されるものである。これらは、人間を主体とする外的な力によってはじめて成立する行為である。12~16 の文において、使役主 (X) と変化対象 (Y) が別物である。また、日本語では意図的な動作主のほかにも、対象物の変化を直接に引き起こすものなら、17 のように非情名詞が主格 (使役主) になることができる。

なお辞書では普通他動詞として扱われる「合理化する」「特化する」には次のよう

な自動詞化した用法も成り立つことに注目したい。

18. 東洋信託が手数料収入を生み出す信託業務に特化する。(読売)

19. 乗車券の販売を廃止して降車時に運賃を支払うシステムを導入すると車  
内は車掌一人に合理化した。(読売)

この文型は前稿で取り上げた“YがZニ／トなる”構文とは、格体制としてはよく似ている。しかしながら、“YがZニ／トなる”の文型では結果状態がニ／ト格によって表されているのに対して、この“YがZに～化する”文型は変化の結果状態を表すものが二つあることで区別されるべきである。例 18、19 では変化の結果状態の一つが「～化する」の前項に来る「合理的に(なる)」 「特別な物事としてある」で、もう一つは二格によって表される変化後の状態「…信託業務」と「車掌一人」である。変化後の状態は変化表現の文においては情報としてもっとも主要なので、必須的に使われなければならない。

(Ⅲ) ii) XがYを「Z」と～化する

20. 少なくとも、抒情的なヴェイルを掛けて、すべてを美化するというのだけは避けようと思う。(学研)

21. 2002 年度、検定教科書が過去の歴史を矮小化している。(毎日)

22. 二、三月たっても、彼は彩子のことを忘れなかった。反って益々理想化してきた。(友情)

23. 神や天皇を利用して、おろかな戦争を聖戦だと美化したことを詫びている。(毎日)

24. そうした歴史的事実を「自虐的だ」と矮小化する教科書がまかり通れば、近隣諸国はもとより、世界の国々から信用されなくなる。(毎日)

25. 消費拡大論者は国土も文化も違うアメリカの大量消費スタイルをあたかもグローバルスタンダードであるかのように理想化しているのではないか。(毎日)

上の 23、24、25 を 20、21、22 と対照しながら見ると、この種の構文は引用表現と変化表現の中間に位置するようなものであることが分かる。20、21、22 文においては「矮小化する」「美化する」「理想化する」などは結果がすでに述語動詞の中に含まれており、表現内容としてはこれで十分で、(Ⅲ) i) 「XがYを～化する」の構文形式をとる動詞である。一方、23、24、25 の文は引用成分の「Z」を伴う表現である。それぞれの文から引用句の「Zと」を削除すると 23´、24´、25´ の文ができる、

23´ 神や天皇を利用して、おろかな戦争を美化したことを詫びている。

24´ そうした歴史的事実を矮小化する教科書がまかり通れば、近隣諸国はもとより、世界の国々から信用されなくなる。

25´ 消費拡大論者は国土も文化も違うアメリカの大量消費スタイルを理想化しているのではないか。

ただし、それぞれの文において、どのように「美化する」「矮小化する」「理想化する」かの内容についての情報が不足していて、意味的には不完全になる。この意味不完全さは 20.21.22.の完全さとは一線に画することができる。というのは、20、21、22 の文にとって主語「Xが」と対象「Yを」さえ存在すれば、最小限の意味の完全さを維持することができるからである。これに対して、23、24「を格」で取りあげられた対象を引用成分の「と格」で評価するという意味構造になっている。25 の引用の構造は副詞的修飾に連続的であるとも言える。一般の「ヨウニ」という形式自体は様態などを表す副詞的な様態の修飾成分を構成するのに対して、25 のこの副詞的な様態の修飾が「理想化する」による評価作用の行なわれ方としての内容の説明になっている。したがって、23、24、25 に含まれる引用句は補語的成分と見てもさしつかえがなかろう。

(Ⅲ) iii) XがYをZに～化する

27. そこで税の不公平是正の観点から源泉分離を廃止、申告分離に一本化することになり、1998 年末の税制改正で 2000 年 4 月から実施が決まった。(毎日)

28. 今回防衛庁は「読みやすいように」と白書をA5 判から A4 変型判に大型化した。(毎日)

27、28 の文はいずれもあるもの X が他のもの Y に働きかけ、作用した結果、Y がある状態を帯びるようになるという型の表現である。Y は X に対して「受け手」で、Z は (Ⅲ) i) 「X が Y を～化する」の表現と同じく結果を表す補語である。この種の動詞にとっては両方とも必須補語である。なお、28 の文では始めの状態 (A5 判) から他の結果の状態 (A4 変型判) へ変えられることであるからどちらも当然関心の対象になってよいのだが、どの要素が動詞「大型化した」にとって欠かさない情報であるかということ、結果状態のほうが始めの状態よりはるかに重要な要素のようである。したがって、28 の文から「～から」の部分は取り去ってもその文が成立するが「～に」の部分を取り去ると意味が不完全になる。

### 3.2 資料に見る「～化する」の用法

#### 3.2.1 自動詞、他動詞、自他両用の使用分布

ここでは「～化する」の用法を新聞記事から集めた用例をもとに、量的側面と文法的意味側面の双方からそれぞれの特徴を見てみよう。資料のうち<sup>7</sup>、動詞用法として用いられるものを自他別に分類すると、自動詞として現れたものが 47 回 (30 語)、他動詞として現れたものが 26 回 (24 語) となっている。<sup>8</sup> 自他両方に使われているのが 5 語あった。以下、その用例を自他そして自他両用の別にあげておく。

～が～化する A: 悪化する、激化する、白化する、特化する、

---

7 読売新聞 (2002 年 1 月 24～27 日、7 月 6～9 日衛星版) からとったもの。

8 回は延べ語数で、語は異なり語数である。

風化する、劣化する、羽化する (18 回／7 語)

B: 実用化する、活性化する、泥沼化する、近代化する、本格化する、表面化する、問題化する、複雑化する、多様化する、沈静化する、老朽化する、顕在化する、長期化する、活発化する、恆久化する、現実化する、具体化する、社会化する、深刻化する、デジタル化する、サラリーマン化する、マンネリ化する (29 回／23 語)

～を～化する C: 強化する (14 回／1 語)

D: 国有化する、大型化する、明確化する、制度化する、視覚化する、立法化する、正当化する、自由化する、一本化する、商品化する、証券化する、専門大学院化する、多様化する、個人単位化する、実用化する、組織化する、共用化する、機械化する、問題化する、フラット化する、データベース化する、デジタル化する、コンビニ化する、CD 化する

～が／を～化する 実用化する、問題化する、具体化する、多様化する、デジタル化する

### 3.2.2 考察

自他を接尾辞で区別することが多い和語動詞と違って、「～化する」による派生動詞は、自他を区別する接尾辞がなく、自他対応ではなく、自他同形である。では、「～化する」派生動詞の意味は自動詞的であるか、他動詞的であるか、また自他両用であるか、の認定は何によって決まるのだろうか。

以上にあげた事例に即してみよう。これは恣意的に決まっているのではなく意味的な要素によって定められる。即ち、これは語基が表す状態がもともと自然発

生的に起こるのが常態であるか、或いは人為的にもたされるのが普通であるかによって決まるといえよう。たとえば 16～20 の例が示すように「表面化する」「泥沼化する」「深刻化する」「現実化する」「複雑化する」などは人の意志とは関わりなく起こってしまう場合が多い。言わば、完全に自然発生的な出来事を表すから、意味的に何ら使役作用の兆候を示さないから、もっぱら自動詞として使われる。

29. 危機管理の欠如が次々と表面化している。(読売)

30. 軍事支援がかつてのベトナムのように泥沼化しなければよいが。(読売)

31. 「双子の赤字」が深刻化した。(読売)

32. 温暖化難民の発生が現実化してきた。(読売)

33. 生殖技術の進歩に伴い問題はさらに複雑化していくだろう。(読売)

他動詞として使いたい時は「表面化させる」「泥沼化させる」「深刻化させる」のように使役の形にする。

そして人間が意図的に引き起こす事態として認識される「制度化する」「視覚化する」「商品化する」「データベース化する」などは

34. 自らの研究成果を商品化しやすくなるメリットが見込める(読売)

35. 複数の金融機関の不良債権をまとめて、証券化し二月中旬をめどに投資家に販売する。(読売)

36. 生産情報をデータベース化して、追跡できるようにする「背番号制」(読売)

37. 女性もまた国家の有為な存在であることを視覚化した。(読売)

いずれも人の手を経ずに実現することは不可能なものである。こういったものは、もっぱら他動詞として使われる。自動詞的に使いたければ「商品化される」「証券化される」「データベース化される」「視覚化される」のように受身で使うのが普通である。一方、自動詞用法の例のうち、他動詞としても使用されるいわゆる自他両用のものもある。筆者があつめた例では自他両用は 5 語で全体の 9.1%に当

たるが、資料収集の範囲を広げれば自他両用の例がもっとたくさん現れてくるだろう。上掲した例に限って言えば、「実用化する、問題化する、具体化する、多様化する、デジタル化する」以外に「活性化する、近代化する、本格化する、活発化する」なども意味的、認知的条件が整えば他動詞としても使えるように思われる。

38. 京都議定書を具体化する責任がある。(読売)

39. 労働分野で終身雇用制度を見直して、雇用形態を多様化する一環として、(読売)

40. 電子線ホログラフィーを実用化するには、技術が未熟だ。(読売)

ただし、これらの自他両用の動詞を自動詞として使うか、他動詞として使うかは下の 41、42. で分かるように話し手の視点、また信念体系によって決まる場合が多い。

41. 東京ガス都市生活研究所が 1999 年に行った「都市生活者意識行動観測」調査では

「総菜などを利用して、料理を簡便化することに抵抗ない」のは 56%。

家庭での食事が簡便化している傾向がうかがえる。(読売)

42. 地上波テレビをデジタル化するには……

テレビがデジタル化すれば、ハイビジョン並みの精細な映像が楽しめるし…… (読売)

### 3.3、「～化する」が持つ受動性

前に掲げた先行研究では「～化」は「～(ある)状態ニナル／スル／サセル」すなわち、自動的变化、他動的变化、使役と三つの基本義を持っているということをよく指摘されているが、「～化」にはもう一つの態、すなわち受動性をも合わせもっていることは殆ど言及されていない。以下の 43～45 の例を見てみると

43. 来年度の税制改正論議に向けて、個人の株式譲渡益課税を申告分離に一本化する既定路線に再び延期論が浮上した (毎日)



44. 個人投資家が株式売買で得た利益、キャピタルゲインに対する課税は現在源泉分離課税と申告分離課税の選択制だが、2001 年 4 月から申告分離課税に一本化することになっている。(毎日)

45. 本月 1 日から建設省は運輸省など公共事業関連省庁などと共に「国土交通省」に一本化される。(毎日)

43.「個人の株式譲渡益課税を申告分離に一本化する」、44.「...課税は申告分離課税に一本化する」、45.「建設省は.....国土交通省に一本化される」に示されるように「一本化する」自他両用の動詞には使役の意味が含まれると同時に、44 のような自動的用法に受動的意味が含意されるというようなことが分かる。すなわち、自他両用の「～化する」派生動詞は「～化する」という一つの動詞形態に自動、他動、使役、受身の意味特性を合わせ持つということが言えよう。これは他の和語動詞には見られない特徴である。

受身は一般に和語動詞の場合、動詞自体が「結果」を強く含意するが、漢語動詞、44 のように「～が一本化する」による自動変化表現においては「が格」が動作主の動作の遂行の結果として語基の状態になるという意味特徴が含まれていて、一種受身的な機能を担いうる。

下の例文 46 はその傾向を強く示唆するものである。

#### 46. 「強調化」

なお、この「強調化」に関しては、その対象となる（すなわち「強調化」を受ける）意味が後項の有する意味（<B>と表示する）である場合（例えば上掲「引つつかむ」がそうであり、そこでは後項「つかむ」の意味が「強調されている」と、対応する非音便形全体の有する意味、すなわち<B>である場合（例えば「ひっこ抜く」は「引き抜く」全体の有する意味、<引っ張って抜き取る>を「強調している」との二種類ある点に注意する必要がある。（1992 齊藤倫明 『現代日本語の語構成論的研究』から借用したもの）

## 4、自他認定の問題点

<表一>

辞書名 項目		<講談社> 日本語大辞典	<集英社> 国語辞典	<旺文社> 国語辞典	<岩波書店> 広辞苑
・	強化	他	他	他	①さらに強くすること（他） ②[心]条件反射から報酬を与えることにより強まること（自）
・	消化	自・他	他	自・他	①物から消えうせて変化すること（自） ②原型をなくして変化させること（他）
	美化	他	他	他	美しく変化させること（他）
	悪化	自	自	自	悪くなること（自）
	変化	自	自	自	変わる或は状態から他の状態に変わること（自）
・	激化	自	自・他	自	激しくなること（自） 激しくすること（他）
	気化	自	×	自	①物質が液体から気体になる現象（自）
	硬化	自	自	自	①物がかたくなること（自） ②意見、態度、調子が強硬になる（自）
・	酸化	自・他	自・他	自・他	物質が酸素と化合すること（自） 広い意味で物質から電子が奪われる変化を総称する
	弱化	自・他	自・他	自・他	だんだん弱くなること（自） だんだん弱くすること（他）
・	軟化	自	自	自	①かたい物がやわらかになること（自） また、やわらかにする（他） <sup>9</sup>

（・）がしてあるのは辞書間、自他の取り扱い方に違いがある項目である。

9 それぞれの項目の「自」「他」は当該の「～化する」動詞の自他の別の記載のある国語辞典によるものである。ただし、『広辞苑』では以上の項目の語には「自」「他」の注記が示されていない。括弧内の（自）（他）は筆者がその意味解釈にもとづいて自分なりに判断してつけたものである

<表二><sup>10</sup>

	を	が	を、が
筋肉（ ）強化する	31 ・ 28	1	4 ・ 9
食物（ ）消化する	22 ・ 23	5 ・ 9	8 ・ 6
町（ ）美化する	34 ・ 35		1 ・ 3
病気（ ）悪化する		35 ・ 38	
物質（ ）変化する		32 ・ 37	3 ・ 1
水（ ）気化する	2 ・ 4	13 ・ 15	20 ・ 19
態度（ ）硬化する	15 ・ 16	8 ・ 11	12 ・ 11
金属（ ）酸化する	4 ・ 3	16 ・ 15	15 ・ 20
電圧（ ）弱化する	9 ・ 14	14 ・ 9	12 ・ 15
態度（ ）軟化する	8 ・ 9	13 ・ 14	14 ・ 15
世の中（ ）革新化する	2 ・ 8	12 ・ 10	21 ・ 20

まず、二つの表を照らし合わせてみると二つの事実気づくだろう。一つは<表一>に示されているように「～化する」の自他性についての判断に辞書間でかなりそのゆれが見られること。11項目のうち、判定にゆれを見せているのはなんと半分近く5つもある。もう一つは<表二>を見て分かるように「～化する」の自他用法についてのネイティブの日本人の認知と、辞書の解釈の間にまたずいぶんゆれが存在することである。特に辞書で「自動詞」としてしか表示されていない項目の「気化」「硬化」「軟化」が江口（1989）の調査結果からも分かるように、「他動詞」としての使用も認知されることである。そして、自他両用認知の数値の高いことにも注目すべきである。

10 <表二>は江口泰生（1989）が「漢語サ変動詞」の自他性について福岡女子短期大学の2クラス（各35、38名となっている）の学生を対象にした調査をもとにしたものである。江口（1989）の調査項目はもともと40あったが、筆者は、今回の研究テーマと関連のある「～化する」が使われる項目だけをピックアップしてこの表にしたのである。

「～化する」の自他性についての認定、認知の問題を考察する前にまず原点に立ち返って、漢語としての“化”の機能と意味を改めて見てみる必要があると思う。

漢語の“化”はもともと動詞であり、自動詞としても、他動詞としても機能する。

自動詞	その町が 焦土と化した。			……………二項述語
	Y	Z		
他動詞	宗教の力で悪人が善人と化した。			……………三項述語
	X	Y	Z	
	宗教家は悪人を善人に化した			
	X	Y	Z	
	魔法使いは魔法で人を石に化する			
	X	Y	Z	

二項述語としての「化する」は自動詞、三項述語の「化する」は他動詞として働く。そして意味は前者が「あるもの（Y）が別のものや状態（Z）に変わる」、後者は「動作主（X）が変化対象（Y）に作用して、対象そのものに変化を生じさせて（Z）に変わらせる」ということになる。その意味構造はそれぞれ

自動詞 [BECOME [y BE INTO-Z]]

他動詞 [X CAUSE [BECOME[y BE INTO-Z]]]

となる。つまり「化する」には、自動詞が持つ状態変化（BECOME）の意味構造を基本として、その上に使役（CAUSE）が付加されていると考えられる<sup>11</sup>。

接辞として使われる「化」が動詞用法の“化する”の持つ機能と意味概念をそのまま受け継いで名詞、形容（動）語基と結合して「～化する」形式の派生動詞を作ると考えられる。

では各国語辞書の扱い方を見てみよう。自他の整理をすると、名詞と形容詞語基の派生動詞には自動詞としての機能しか持たないもの、他動詞としての機能しか

11 影山（1996）を参照

いもの、及び自他両用のものと、三つのタイプに分類できる。

自動詞機能しかないもの：悪化、硬化、軟化

他動詞機能しかないもの：強化、美化

自他両用のもの：激化、酸化、弱化

これらの動詞は語基となる名詞、形容詞の表す状態に「させる（つまり使役他動詞）」或は「なる（つまり変化自動詞）」ということの意味するか、どっちの意味になるかは語基名詞、形容詞の意味と社会通念によって決められるとよく言われるが、その認知のあり方は辞書間ではかなり違いを見せている。辞書間において自他の注記が異なるのはこれらの動詞が自他の分類のしづらいものとなっていることを示している。

また<表二>であるが、上述したように「～化する」には基本的に自動、他動（使役）両方の概念構造を持っている。これらの派生動詞の名詞、形容詞語基の意味から考えると、その状態に変化することは、対象物自らの性質によっても、外的な作用によっても可能であると判断される。意味的、認知的条件が整えば名詞、形容詞語基の「～化する」派生動詞はすべて使役他動詞として用いることができると結論付けることができる。ネイティブスピーカーの被調者も多分そういう認知のもとでそれぞれの項目の自他用法についての判断をしたのだとかがえる。

## 5. 結び

接辞「化」を含む派生語「～化」は中国語の文章においてもよく用いられている。

「～化」は語構成といい、意味といい、日中両語間ではかなりの程度まで対応を示しているが、意味、用法のずれが少なからず存在することも否めない。そのような両言語間の相違点と類似点を確明することによって、「～化」としての普遍性と共に、日本語なり、中国語なりの独立性も見えてくるだろう。

日中両語の“化”についての対照研究は今後の機会に譲ることにする。

付記：本稿は2002年12月東呉大学日本語学科が主催した「日語教学国際会議」で口頭発表したものをさらに修正、加筆したものである。

## 参考文献

- 池上素子 「～化」について—学会抄録コーパスの分析から—『日本語教育』106号、2000。
- 江口泰生 「漢語サ変動詞の自他性」『奥村三雄教授退官記念—国語学論叢』桜社、1989。
- 影山太郎 『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版、1996。
- 加納千恵子 「漢字の接辞的用法に関する一考察（2）—「化」の品詞転換機能について」『文藝言語研究 言語篇』第17号 筑波大学、1990。
- 小林英樹 「漢語動詞の自他」 『日本語教育』107号、2000。
- 斉藤倫明 『現代日本語の語構成論的研究—語における形と意味—』ひつじ書房、1992。
- 須賀一好 「自他違い—自動詞と目的語、そして自他の分類—」『動詞の自他』ひつじ書房、1995。
- 蘇文郎 「変化表現についての一考察」『東呉日本語教育学報』24期、2001。
- 寺村秀夫 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版、1982。
- 田窪行則 「～化」『日本語学』1986 VOL. 5 明治書院、1986。
- 湯廷池 「漢語派生動詞“…化”的概念結構與語法功能」『中國語文研究』13、2002。
- 水野義道 「漢語系統接辞の機能」『日本語学』1987 VOL. 6、1987。
- 森田良行 『動詞の意味論的文法研究』明治書院、1994。

森山卓郎 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院、1998。

辞書 岩波書店 『広辞苑』 (5 版)。

旺文社 『国語辞典』、1988。

講談社 『日本語大辞典』、1989。

集英社 『国語辞典』、1993。

学習研究社 『国語大辞典』、1978。

用例出典 読売新聞 (衛星版)

毎日新聞、2000 (CD-ROM)